診療室

循環器からエキゾチックペットの道へ

若松　勲[†]（ペンギンペットクリニック院長）

現在獣医師としての私があるのは，優秀な獣医師の先輩方との出会いがあったからと，心から幸運に感じている．大学を卒業するころは，小動物臨床を志して，心臓病に興味があったため，ただ，漠然と循環器を中心に臨床ができればと思っていた．その時の循環器を勉強したいという思いが，茨の道を歩むことになるとは，思ってもいなかった．

1　志一つで東京農工大学へ

最初に勤務した動物病院で1年ほど経過すると，循環器をもっと詳しく知りたいという気持ちがさらに増していった．東京農工大学に心臓を専門にしている有名な教官が着任したという話を聞き，何の面識もないのに，2月の雪が降る中，外科学研究室へ行き，「心臓を勉強したいので動物臨床医学研究所に入れてほしい」と申し入れた．申し入れた教官は，言わずと知れた山根義久先生である．初めてお会いしたにもかかわらず，「寒いのに良く来たな～」と言って迎え入れていただいたことを今でも鮮明に覚えている．何の実績もないのに，よく山根先生に会いに行けたものだと，今さらながら思う．若さゆえの怖いもの知らずな行動である．先生の計らいで，広島県福山市の竹中先生の所で心臓の基礎と一般臨床を学び，その後，㈶鳥取県動物臨床医学研究所へ行くことなる．

2　はじめての体外循環

ついに，待ちに待った体外循環を行う心臓手術の日がやってきた．僧房弁閉鎖不全症に対し，豚生体弁を用いた弁置換術で，しかも，連続して2症例を実施した．私は人工心肺装置の操作をするよう命じられ，先輩獣医師2人からの指導を受けながら，人工心肺装置に掛かりきりだった．体外循環をスタートさせるために，症例の心拍は徐々に下がっていったが，自分の心拍はどんどん早くなっているのを感じた．左心房を切開して，肥厚している僧房弁と腱索を除去した後，生体弁を縫着する．生理食塩水を注入して弁の逆流がないことを確認して左心房を縫合する．心マッサージ及び除細動により心拍動が再開するのを間のあたりにすると，感動のあまり目頭が熱くなった．手術終了後も，24時間監視が必要であるため寝る暇もなく，定期的に採血して血液ガスなどを測定した．今度はICUに朝まで詰めるはめになった．あまりにも緊張と興奮が続いたため，徹夜しているにもかかわらず，夜になっても眠ることが出来ず，今さらながらとんでもないところに来てしまったなと一人寝床でつぶやいた．また，動物臨床医学研究所では毎月合同カンファレンスがあり，臨床経験豊富な方々が全国から集まるので，その道のスペシャリストに直接指導していただけたことは非常に見聞を広げることになり，鳥取での勤務医時代は充実した日々を過ごすことができた．

3　エキゾチックペットへの道

このように循環器を目指していた私だが，現在，群馬県の伊勢崎市でエキゾチックペットを主体とした動物病院を開業して9年目を迎えようとしている．決して好んでエキゾチックペットを診療していたわけではなかったが，何故だが，兎，カメ，フェレット，ハムスターなどの診療を行う機会が多かった．今では，兎やフェレットの手術は日常的に行っているが，今から20年程前の大学卒業したてのころは，エキゾチックペットに関する文献や教科書は皆無であり，手探りでの診療が続いた．しかしながら，資料がないからこそ研究心をくすぐられ，「何故なのだろう．どうしてなのだろう．」という気持ちからエキゾチックペットの診療への道へと徐々にシフトしていくこととなった．

4　エキゾチックペットの学会発表

意気揚々とエキゾチックペットに関する学会発表を行

若松　勲

—略　歴—

1994年　日本大学農獣医学部獣医学科卒業（現生物資源科学部獣医学科）
1995年　日本大学獣医内科学研究生
1996年　都内動物病院研修医
1997年　㈶鳥取県動物臨床医学研究所竹中動物病院出向（広島県）
1999年　㈶鳥取県動物臨床医学研究所
2002年　群馬県伊勢崎市三室町にペンギンペットクリニック開業

† 連絡責任者：若松　勲（ペンギンペットクリニック）
〒379-2235　伊勢崎市三室町5330　☎・FAX 0270-63-0303　E-mail : wakawaka417@ybb.ne.jp

図１　カメの皮膚潰瘍に炭酸ガスレーザーを照射

図２　トカゲの関節に近赤外線を照射

っても，質疑応答になると会場は静まり返り，相手にされていないと感じていた．気を使って座長からいくつか質問していただければまだ良いが，早々に発表を終了されることが多々あった．しかしながら今日では，エキゾチックペットに関する新知見が次々と報告され，犬や猫と肩を並べるほど急成長を続ける学問の一つとなりつつある．もちろん，今でもエキゾチックペットに関する学術的な資料は不足しているが，とくに最近は，若い獣医師からの学会発表や学術論の投稿が増えてきており，喜ばしい限りである．最近，１日の診療で，犬猫の来院が１件もない日があり自分でも驚いている．今後もエキゾチックペットに対する情熱はしばらく続きそうである．

地域の動物病院の協力もあり，兎を始めとしてエキゾチックペットの２次診療施設として定着してきた．近県の動物病院からも紹介いただき，通院が不可能な場合は入院にて治療を施し，ある程度状態が安定した後は，主治医のもとに返す方法をとっている．

最後にこの場をおかりして山根先生をはじめ，これまでお世話になった方々に深くお礼申し上げるとともに，私が学んだ知識・技術を診療現場で広く提供していくことでお返しができればと考えている．